

育児期初期における夫婦のやり取りの様相： 夫婦の省察に視点をあてた質的研究

小山 里織¹，森山 雅子²，小林佐知子³，
小原 倫子²，西野 泰代¹

(受付 2023年10月25日)

要 旨

本研究の目的は育児期初期の夫婦のやり取りの様相について、省察の概念を用いてその詳細を明らかにすること、さらにその関連要因について検討することであった。生後2ヵ月の乳児をもつ夫婦10組を対象に子どもが2ヵ月と4ヵ月の時期に家庭訪問を実施し、子どもの泣き場面に焦点を当てた面接調査を行った。その結果、育児期初期の夫婦が日常のコミュニケーションのなかで省察を行っていること、その内容は〔親自身に関する省察：育児の方針、育児行動、配偶者に対する評価〕、〔子どもに関する省察：子どもの特徴、変化・成長〕、〔他者を通じた省察〕の3つの大カテゴリーと5つの小カテゴリーで構成されることが分かった。2ヵ月では〔子どもに関する省察：子どもの特徴〕が多く、4ヵ月では〔子どもに関する省察：子どもの特徴、変化・成長〕、〔親自身に関する省察：育児行動、配偶者に対する評価〕が多い傾向にあった。また省察の特徴によって10組の夫婦は《全体的省察タイプ》《親・子ども省察タイプ》《子ども省察タイプ》の3タイプに分類され、それぞれのタイプには特徴的な関連要因があることが示された。なかでも《全体的省察タイプ》は3つの大カテゴリーの語りが認められ最も省察が多かった。このタイプの母親は育児休暇期間が1年以内で早い時期から復職後の保育計画をし、育児について父親への期待や調整を行っていた。一方父親は母親以外からの育児情報があること、家事や育児を分担していることが特徴であった。これらの結果から育児期初期の夫婦が子どもの泣きを介して、日常的に気付きと呼べる認知レベルの省察や自分たちの育児行動、配偶者の育児行動の評価という省察をしていることが示唆された。

キーワード 夫婦の省察、父親の育児、質的研究

問題と目的

育児について養育者が自分自身を振り返ることは、良好な親子関係を形成するうえで重要となることが指摘されている (Fonagy, 1996; 藤崎, 2002; 輿石, 2005; 朴・杉村, 2009; 田

¹ 広島修道大学健康科学部

² 桜花学園大学

³ 静岡県立大学短期大学部

代・重橋, 2019)。Fonagy (1996) は、母親が自身の育児感情を内省することが、子どもの愛着形成に関与することを指摘した。また興石 (2005) は、母親が自身の育児行動についての特徴的なパターンを理解することが適切な育児行動に大切となることを指摘した。朴・杉村 (2009) は、親のモニタリングや敏感性、メタ認知、内省的注意力といった次元の異なる概念を省察として位置付け、省察の個人差によって親自身が陥りやすい傾向があることを指摘し育児支援の糸口となる知見を示した。他にも田代・重橋 (2019) は、親の育児についての省察がポジティブな育児感情に影響を与えることを指摘している。しかしながら、これまで育児についての省察を扱う多くの研究では、母親が主な育児の担い手であることを前提に母親の省察過程やその機能が検討され、父親の省察、さらには夫婦の省察が研究対象とされることはなかった。

父親の育児が注目され男性と女性がともに家庭生活における活動と仕事を両立できることを目的に掲げた「男女共同参画」の理念が社会に周知されライフスタイルや雇用形態が変化するなかで、男性の育児関与への期待は高まり、育児期にある父親を対象とした研究が増えてきた。そこでは父親も育児をとおして発達することやそのプロセスが明らかにされてきた (森下, 2006; 青木, 2009)。また父親の育児関与が父親の主観的幸福感や夫婦の関係性に関連することが報告されている (澤田, 2019)。さらに近年では、育児や親子関係を検討する上で、そもそも父親と母親を別々にとらえるのではなく、夫婦をペアでとらえることの必要性が指摘されている (神谷, 2013; 加藤・神谷, 2017)。それらの知見を踏まえると父親も育児について自身を振り返ることによって子どもとの関係を築いていると考えることができるし、夫婦で育児を振り返り、お互いの行動や考えの相違に気付くことで、親子関係さらには夫婦関係を形成していることが推測される。養育者の省察が育児の行動的側面や精神的側面に重要な意味をもつとすれば、夫婦の省察について明らかにすることは父親と母親がともに家庭生活において一緒に家事や育児をするうえで有意義なことと考える。

重要な他者との振り返りについては、チーム研究においてその効果が確認されている。秋保・縄田・池田・山口 (2018) はチームの振り返りは、チーム活動を改善するうえで重要な学習プロセスとされ、チーム全体で振り返ることによりメンバーは行動の過ちや意見の相違などに気付くことができ、その結果、行動や考えの改善と共有が行われるという。また保育の分野では、他の保育者の存在が保育を共有する者の省察を深め、自分の保育実践を意味づけるだけでなく、子どもに寄り添うことにつながることを指摘されている (金, 2009)。これらの研究は目的を共有する重要な他者との省察が自身のその後の行動や考えに有効となることを意味するものである。したがって、父親と母親が育児について二人で振り返ることは、より効率的に育児スキルをアップさせるだけでなく、子どもとのかかわりひいては夫婦関係にとって重要となるといえよう。

育児期の夫婦を対象にした研究では、これまで育児における夫婦間の相互調整の重要性が指摘されてきた（柴山, 2007; 青木, 2009; 加藤・黒澤・神谷, 2014）。例えば、柴山（2007）は保育園の送迎分担という夫婦間の調整過程での夫婦の話し合いの効果を指摘し、そのプロセスにおいて妻側からの働きかけが重要となることを指摘した。加藤・黒澤・神谷（2014）は、父親の育児を促進する母親の指示的な働きかけが父親の育児関与や育児協同感、夫婦関係満足感に影響することを指摘した。また夫婦のコミュニケーションの効果については、母親のコミュニケーションスキルやコミュニケーションのスタイルが結婚の質や満足度と関連することが指摘されている（石・桂田, 2006）。さらに清水（2020）は、3～4歳児をもつ子育て中の夫婦の話し合いについて研究し、お互いの育児のズレが大きくなる前にお互いの思いを伝達することの重要性を指摘した。清水（2020）が指摘するように育児期初期の夫婦の育児についての話し合いはその後の育児、さらには夫婦関係に重要であるといえよう。しかしながら、育児期初期の父親と母親が育児についてどのようなやり取りをしているのかについて細部に踏み込んだ検討はされていない。そこで本研究では夫婦の日常場面でのやり取りの様相について父親と母親のペアデータから、省察の概念を用いて明らかにする。

親の育児についての省察は、子どもの状態を正確に読み取るために重要となる（朴・杉村, 2009）。とりわけ乳児期では、子どもの泣きを介して親子の相互交渉は行われる（Green & Gustafson, 1983）。子どもにとって泣きは欲求や健康状態を伝えるシグナルであると同時に、親にとっても泣きにうまく対処できたかどうかによって、養育スキルが形成、修正、強化されることにつながる（陳, 1986）。したがって、育児期初期における自身の育児についての省察は泣きの解釈にも効果をもつといえよう。陳（1986）によると、子どもの泣き場面で繰り返し引き起こされる親子のやりとりによって養育者の有能性が確かめられ、相互交渉の楽しさが経験されるという。これらをふまえると育児についての省察は泣きの解釈を通して、親子の相互交渉や養育行動に影響していると考えられることができる。

本研究の目的は、第1に育児期初期の泣き場面に焦点を当て、夫婦のやり取りの様相について省察の概念を用いて明らかにすることであり、第2の目的は夫婦の省察に関連する母親要因と父親要因について検討することである。子どもの泣き場面は自然な日常場面であり、夫婦のやり取りが生じやすいことから、実験や質問紙ではとらえることができないリアルな夫婦の省察の内容を明らかにできると考える。そして夫婦の省察の関連要因を明らかにすることができれば、父親の育児参加を促す具体的な支援のあり方を示す手がかりが得られる可能性がある。

方 法

調査対象者：知り合いを通して紹介を受けた夫婦10組であり、対象児はすべて第1子であった。全て正期産であり出産後の経過は全員母子ともに良好であった。生後2ヵ月では、子どもは、快の表現が明確になり、クーイングと呼ばれる発声や微笑がみられるようになり（平嶋，2007）父親にとって子どもと関わりやすくなる最初の時期と考える。また，4ヵ月は，子どもは周囲の人に対する反応と異なる反応を母親に対して示すようになる（平嶋，2007）。例えば，母親にあやされれば泣き止む，母親が視界から消えると泣きだし，再び姿を見せれば歓迎する。したがって，2ヵ月から4ヵ月の時期は育児における夫婦のやり取りにおいても変化が現れる時期であり，育児期初期の夫婦の省察を捉えるうえでも重要な時期と考える。

調査時期：2017年2月～2018年7月。

手続：子どもが生後2ヵ月と4ヵ月の時期に家庭訪問をして夫婦を対象に第一著者が面接調査を行った。本研究では実験ではとらえきれない自然な日常シーンの泣きをとらえるために1～2時間程度のジョイント・インタビューを実施し，各家庭での日常的な泣きのエピソードについて収集した。

調査内容：1週間以内の子どもの泣き場面のエピソードについて，子どもが泣いたときに夫婦でどのように対応したのか詳細に尋ねた。泣きのエピソード以外に語られる夫婦の行動傾向やお互いを感じていることについても自由に語ってもらった。さらに省察との関連を検討する母親要因として，実家の利用頻度，育児休暇の有無・期間，復職後の保育計画，父親への育児・家事の期待と調整，父親要因として育児経験，子どもと生活を始めた時期，育児情報（両親学級・育児教室等），家事・育児の分担について尋ねた。これらの要因はすでに先行研究（柴山，2007；青木，2009；加藤・神谷，2017）によって夫婦が協同育児する上での重要性が指摘されていることから，夫婦の省察との関連を検討する上で有意義と考えた。面接内容は事前に対象者の許可を得てICレコーダーに録音し，後日逐語録を作成した。

倫理的配慮

面接に際し研究の趣旨，内容，情報の取り扱い等について文書及び口頭で説明したのち，対象者が研究参加に同意した場合，同意文書に夫婦による署名を得た。なお，本調査の実施にあたっては，所属機関の研究倫理審査によって審査され，研究の実施が承認されている（承認番号：第17MH043号）。

分 析 方 法

本研究では、朴・杉村（2009）を参考に子どもの泣きについて言語化された夫婦の相互交渉の中で、肯定的に振り返り自己の心的状態や他者の心的状態から自分や他者の行動の意味を認知し理解しようとすることを省察と定義した。夫婦の意見が共通で、互いに確認し合うことで理解を深める場合や、互いの意見は異なっても間違いや意見の相違に気付くことで行動や考えの改善と共有が行われている場合を省察と判断した。育児について振り返る語りであっても夫婦の意見が異なり、一方が指摘する行動や考えに対してもう一方が理解を示さないまま話題が終了した場合は省察としなかった。分析には朴・杉村（2009）の親の子育てに関する省察の3層モデルを参考にした。このモデルは主に認知レベルの観点と対象の分離という観点から構築されている。認知レベルは一次的省察（時間軸を起点に子どもと向き合っている場での気付き）から二次的省察（分析・評価して個別的に認識する）へ、さらに三次的省察（長期的に蓄積されて洞察・抽象化して価値観が変わる）へと低次から高次のレベルに省察が積み上げられるものであり、対象の分離とは、省察の対象を親自身に関する情報、子どもに関する情報、他の親や子どもに関する情報という観点で分類したものである。まず親自身に関する省察〔親省察〕、子どもに関する省察〔子ども省察〕、他者を通じた省察〔他者省察〕の3つの省察を想定し、泣きについて語られたエピソードとインタビュー中の夫婦の会話の中から、意味のあるまとまり（内容を表す句、及び文）に区切り、具体例となる特徴的な語りを抽出しラベルをつけた。その際できるだけ正確に把握するために、語られた表現を用いることを心掛けた。次にKJ法を参考に類似したまとまりに分類し、それらの規則性を特定して省察の定義に沿ってカテゴリー化作業を行った。そして内容が近いと判断されるものをまとめ小カテゴリーから大カテゴリーへとまとめた。大カテゴリーを〔 〕、小カテゴリーを〈 〉で示す。得られた概念について著者以外の2名の心理学の研究者と相談し概念の精密化を行った。

結 果

1. 研究協力者の背景

対象者の基本的属性を Table 1 に示す。平均年齢は父親30.0（26–39）歳，母親30.3（26–41）歳であった。対象児は第一子（男児2名，女児8名）であった。すべての対象者が核家族であり日中の主な養育者は母親であった。職業形態について，父親は全員常勤，母親は常勤7名，非常勤1名，専業主婦1名，学生1名であった。母親の育児休暇期間は平均16ヵ月

Table 1 対象者の属性

ID	就業形態		産後育児休暇期間	産後里帰り期間	子どもの性別	分娩様式	授乳形態
	父親	母親					
①	常勤	常勤	1年	1ヵ月	男児	帝王切開	混合
②	常勤	専業主婦	—	1ヵ月	女児	経膈分娩	人工
③	常勤	常勤	1年	1ヵ月半	男児	経膈分娩	混合
④	常勤	常勤	6ヵ月	—	女児	帝王切開	混合
⑤	常勤	大学生	8ヵ月(就職内定)	3週間, 夫婦一緒に里帰り	女児	経膈分娩	混合
⑥	常勤	常勤	3ヵ月	—	女児	経膈分娩	混合
⑦	常勤	非常勤	1年(延長可能)	1ヵ月	女児	経膈分娩	混合
⑧	常勤	常勤	36ヵ月	2週間	女児	経膈分娩	母乳
⑨	常勤	常勤	1年	1ヵ月	女児	経膈分娩	混合
⑩	常勤	常勤	36ヵ月	2ヵ月	女児	帝王切開	混合

注. ID⑤の産後育児休暇期間は出産日から就職するまでの期間を示す。

(3ヵ月-36ヵ月)であった。10名中8名の母親が里帰りをし、産後の里帰り期間は平均1ヵ月(2週間-2ヵ月間)であった。分娩様式は経膈分娩が7例、帝王切開が3例、授乳形態は混合栄養8名、母乳栄養が1名、人工栄養が1名であった。

2. 夫婦の省察の概念とカテゴリー (Table 2)

2ヵ月と4ヵ月における夫婦の省察は、〔親省察〕〔子ども省察〕〔他者省察〕の3つの大カテゴリーに分類することができた。Table 2に各カテゴリーの概念、各月例の語り、省察数を示した。〔親省察〕は、親自身の態度や言動に関するものであり〈育児の方針〉〈育児行動〉〈配偶者に対する評価〉の小カテゴリーで構成された。〈育児の方針〉はしつけや親としての在り方について振り返ったり、確認したりする語りである(2ヵ月4話, 4ヵ月3話)。〈育児行動〉は子どもの欲求への対処方法について意見を求めたり、お互いの対処方法について振り返ったりする語りである(2ヵ月9話, 4ヵ月17話)。〈配偶者に対する評価〉は配偶者の育児行動や情動について称賛したり、肯定的な評価をするものである(2ヵ月4話, 4ヵ月9話)。〔子ども省察〕は、自分たちの子どもの情報や行動に関するもので〈子どもの特徴〉〈変化・成長〉の小カテゴリーで構成されていた。〈子どもの特徴〉は主に泣き場面での子どもの特徴的な表情や態度についての気づきを説明したり、確認し合ったりするものである(2ヵ月10話, 4ヵ月18話)。〈変化・成長〉は、子どもの特徴について時間経過の視点をもって振り返るものである(2ヵ月5話, 4ヵ月19話)。〔他者省察〕は、夫婦以外の人物から受けた指導

Table 2 育児についての夫婦の省察カテゴリーと各月例の省察数

大カテゴリー	小カテゴリー	概念	語りの例：上段は2ヵ月，下段は4ヵ月（ID）	省察数（ID）
	育児の方針	育児の方針や親としての在り方について二人で振り返ったり，確認する。	M: (父親には育児について) 言わないとわかんないよねと思って，…意識的に言うようにしてたかな。F: そういうことね。そういう風に言ってくれてたから聞くようにできたかな。導いてくれていたわけね。(④)	4 (④⑤⑦⑨)
			M: 私がいけないと何もできないでは困るから全部言ってる，私の背中を見ろって感じよね。F: (お風呂の時は) オムツかふれ用の薬準備してね…。ストープつけて。M: これは教育の賜物。「あれがない」「これがない」「それがない」全部言ってる。共働きになるの分かってるし，覚えてもらわないと，(一緒に) できないし。F: (準備を) 覚えていったね。(⑤)	3 (④⑤)
親省察	育児行動	対処方法について意見求めたり，お互いの対処方法について振り返る。	F: 横の方が長時間抱きやすいっていうの？ M: 縦だと寝ない。横にしなないとねないね。必ず寝そうなどときには横にする。F: 寝かせるか寝かせれないかは勝負だね。(②)	9 (①②④⑤⑨)
			M: やっぱり泣いてるのはねえ，理由があるけえ泣いてるから…。泣きやむんじゃけえもうちょっと抱っこしてあげてもいいんじゃないかなって。F: 我慢も大事よ。あんまりやりすぎるとどうかなって個人的には思ったりもする。正解かどうか分からないんで…どっちがほんとの正解なんだろう。(気持ちに) 余裕があるなら泣かしといてもいいかなって。(②)	17 (①②④⑤⑦⑨)
	配偶者に対する評価	配偶者の育児行動や情動について称賛したり，肯定的な評価をする。	M: 結構発見するよね。おもしろい視点だったり。しゃっくりをする時はね，泣かないとか。F: そうそう。ミルクを飲んでしゃっくりをしているときは泣かないんだよ。しゃっくりでは泣かない。(④)	4 (④⑤⑨)
			M: スーパーで(母親がいなかったときに) 泣かなかったことが嬉しそうだった。F: そう。あれでだいぶ回復したね。そこからはもう，穏やかな心持ちで「もうこれは発達段階だから，もうちょっと経ったらまた変わってくる」と。M: そうそうそう。今では自信を回復して，積極的に抱っこして話しかけるようになって。F: うんうんうんうん。(⑨)	9 (①②④⑤⑦⑨)
子ども省察	子どもの特徴	子どもの特徴的な表情や態度についての気付きを説明したり，確認し合う。	F: 夕方泣くよね。M: うん。夕方用事をしようと思ったらすぐに泣きだす。F: 一瞬よね。(眠りが) 浅い。M: (お昼寝は) ずーっと寝るとかじゃなくてずーっと寝るくらいで。F: 外出した日は結構寝るんじゃない。M: そうじゃない時もあるのよ。(③)	10 (①③④⑤⑦⑥⑨⑩)
			F: 環境が違う時とかは…。よく泣くんかなーと。M: 私の実家にいてもダメ。F: うん。でも何か，違う家とかに行くとか…ぐずるかな。M: うん。特に，昼間はそんなことないけど，夜になるとダメよね。(⑧)	18 (全夫婦)
	変化・成長	子どもの特徴について，時間経過の視点をもって振り返る。	M: 最近，泣き声が大きくなってきたよね。眠たいときに抱っこしたときにすごく泣くようになってきた。F: あー， そうだね。泣いたり泣かんかったりね。泣く真似したりするから。M: 泣く真似？ F: 泣きだして，また泣くのやめて…。M: ああ， グズグズね。(②)	5 (②③④⑤⑨)
			M: 3人でおる時は…。F: 泣いたとこがない。M: そんなに泣かない。F: うん， うん。M: ちよっと最近，認識力が出てきたんかね。F: うん， うん。M: 10分も(母親の) 姿が見えなくなると…。F: 泣く。すごく…。M: すごく変わったなと思ったのが？ F: うーん。ここ3週間。(母が) 顔見せたら泣き止む感じ。(⑥)	19 (全夫婦)
他者省察	—	夫婦以外の人物から受けた指導や本などから得た情報について確認し合う。	M: 基本は押さえてきたね。F: 沐浴のやり方とか，泣いても気にするとか， イライラするとかすごい参考になったよね。(⑤)	4 (④⑤⑨)
			M: 最近外に出るようになって…。保健センターに行くようになって，聞いてるとやっぱり， やっぱり上の子に(親が) 構ってると， 下の子も多分そういうのを察して親をひきつけるようなことをすることが多いんだなっていうのは思った。F: なるほどね。やっぱり，(上の子がいると) 違うよね。(⑦)	6 (④⑤⑦⑨)

注. Mは母親の語り，Fは父親の語りを示す。

や本などから得た情報について確認し合う語りであった(2ヵ月4話，4ヵ月6話)。「他者省察」は「親省察」や「子ども省察」と比較し省察数が少なく，人物とそれ以外(本やネットなど)の省察を一つのカテゴリーとしてまとめることでむしろ育児期初期の省察の特徴が明確となると判断したことから，小カテゴリーを設けていない。

Table 3 夫婦の省察タイプと省察カテゴリーの内訳

省察タイプ	各カテゴリー ID	〔親省察〕			〔子ども省察〕		〔他者 省察〕	合計
		〈育児の 方針〉	〈育児行動〉	〈配偶者に 対する評価〉	〈子どもの 特徴〉	〈変化・ 成長〉		
《全体的省察》 〔親〕〔子ども〕〔他者〕	④	2	4	1	3	2	3	15
	⑤	1	3	1	3	3	1	12
	⑦	0	3	2	2	3	1	11
	⑨	0	3	3	1	2	1	10
《親・子ども省察》 〔親〕〔子ども〕	①	0	1	1	2	2	0	6
	②	0	3	1	3	2	0	9
《子ども省察》 〔子ども〕	③	0	0	0	0	2	0	2
	⑥	0	0	0	2	1	0	3
	⑧	0	0	0	1	1	0	2
	⑩	0	0	0	1	1	0	2
合計		3	17	9	18	19	6	72

3. 夫婦の省察タイプの特徴と関連要因

Table 2 に示されるように夫婦の省察は〔子ども省察〕が最も多く、なかでも4ヵ月の〔子ども省察〕は全ての夫婦で語りが認められた。ただし、夫婦によって省察内容に特徴的な傾向があり、〔親省察〕や〔他者省察〕は語りが認められる夫婦とそうでない夫婦に分かれ、特に4ヵ月でその差が顕著であった。そこで4ヵ月の省察内容によって夫婦を分類したところ、夫婦の省察タイプは以下の3タイプに分けることができた。Table 3 は4ヵ月における夫婦の省察タイプと省察カテゴリーの内訳を示したものである。

タイプⅠのID ④⑤⑦⑨の4組の夫婦は、〔親省察〕〔子ども省察〕〔他者省察〕の3つのカテゴリーの語りが認められたタイプであったことから《全体的省察タイプ》と名付けた。タイプⅡのID ①②の2組の夫婦は、〔親省察〕と〔子ども省察〕の2つのカテゴリーの語りが認められたタイプであり、《親・子ども省察タイプ》とした。そしてタイプⅢのID ③⑥⑧⑩の4組の夫婦は〔子ども省察〕のみの語りであったことから《子ども省察タイプ》とした。

次に夫婦の省察3タイプに特徴的な要因が認められるかについて母親要因（実家の利用頻度、育児休暇の有無・期間、復職後の保育計画、父親への育児・家事の期待と調整）と父親要因（育児経験、子どもと生活を始めた時期、育児情報、家事・育児の分担）との関連を検討した。Table 4 に夫婦の省察3タイプとそれぞれの関連要因及び対象者の語りを整理した。インタビュー中の対象者の語りから直接確認できたものを分析対象とした。判断が難しい語りについては複数の研究者によって会話の文脈から判断した。その結果《全体的省察タイプ》

Table 4 夫婦の省察タイプと関連要因

タイプ	ID	母親要因					父親要因				
		育児休暇期間	実家の利便性 ^{注2}	復職後の保育計画 ^{注3}	期待	調整	父親への期待・調整 (M: 母親の語り, F: 父親の語り) ^{注4}	育児経験 ^{注5}	生活を始めた時期	母親以外の育児情報	家事・育児分担 ^{注6}
I 全体的省察	④	6ヵ月	—	○	○	○	M: 言わないと分からないだと思って、意識的に言うようにしていた。だいたいできるよね。F: そういうことね。…導いてくれていたわけね	—	2週間	○	◎
	⑤	8ヵ月 ^{注1}	○	○	○	○	M: 二人で育児をしないと仕事ができない。(育児については)私がいなくても大丈夫。M: お風呂の入れ方とか、準備から教えたよね。F: がんばりますよ。スバルタです(笑)	○	1週間	○	◎
	⑦	1年	○	○	○	○	M: 一緒にやれば家事と育児が半分になるから、私もだいぶ楽になるし。(父親の)仕事が早く終わったときはやってもらうようにしてるよね。	—	1ヵ月	○	○
	⑨	1年	○	○	○	—	M: 職業柄、私よりもよく知っていることがあると思う。困ったら(父親に)聞いてちょうよね。	—	1ヵ月	○	◎
II 親・子ども省察	①	1年	○	—	○	—	M: 無理やりっていうわけではないけど、気が付いてやってくれる。(父親は)大体何でもできる方だと思う。F: (母親の)やり方見とって、そのやり方でやるようにしている。	○	1ヵ月	○	○
	②	—	—	—	○	—	M: 頼めば大体何でもやってくれる。大抵できる方よね。	○	1ヵ月	—	○
III 子ども省察	③	1年	○	—	—	—	F: 自分のやり方でやる M 私の言うことは聞かないから、もういいやと思って(父親に)言わない。	—	1ヵ月半	—	△
	⑥	3ヵ月	—	○	○	—	M: 一緒に育児をしたいから逐一話す。F: 言われたことをするだけですね。	—	1週間	—	○
	⑧	36ヵ月	◎	—	—	—	M: 留守番を頼むくらいなら、(子どもを)一緒に連れていく。私のやり方を必要としていない。F: そうしてもらった方がいいので。	—	2週間	—	○
	⑩	36ヵ月	◎	—	—	—	M: 私がやった方が早いから、あまり(父親に)お願いしない。F: 一人で何でもしようとしなくてもいいのに…。別に自分がやってもいいんですけど、やり方があるみたいなので。	○	2ヵ月	—	○

注1. ID ⑤の育児休暇期間は出産日から就職するまでの期間を示す。

注2. ほぼ毎日利用している場合◎、1~2回/週利用している場合○、1回/数ヵ月の場合は—とした。

注3. すでに保育園に入所していたり、入所計画を具体的にしている場合に○とした。

注4. 語りから直接確認できたものに○、判断が難しい語りについては複数の研究者によって会話の文脈から判断した。

注5. 姪や甥の育児や年の離れた兄弟の育児経験がある場合に○とした。

注6. 家事と育児両方を分担している場合◎、育児を分担している場合○、どちらもしていないと判断した場合は△とした。

を示した4組の母親は、全員育児休暇が1年以内（6ヵ月から1年）ですでに「復職後の保育計画」をしていた。そして4人中3人に父親の育児や家事への「期待」と「調整」の語りがあることが特徴であった。一方、このタイプの父親は母親以外からの「育児情報」があり、病院で受けた保健指導、保育園や職場で得た育児情報などを参考にして育児をしていた。また「家事・育児分担」をしていることが特徴であった。

《親・子ども省察タイプ》の母親は、「復職後の保育計画」はなかったが、共通して父親への育児の「期待」を示す語りが認められた。父親は年の離れた兄弟や姪や甥の「育児経験」があること、「育児分担」の語りが認められたことが特徴であった。

《子ども省察タイプ》を示した母親は、ID⑥を除いて父親への「期待」と「調整」の語りはなく、「実家の利用頻度」が高い傾向にあった。特にID⑧⑩は実家が近所であり、3～4回/週実家に帰ると回答した。そして《子ども省察タイプ》の父親は全員母親以外からの「育児情報」がないことが特徴であった。ID⑥は母親の「復職後の保育計画」や、父親への育児の「調整」の語りはあったが、父親の「育児経験」や「育児情報」はなかった。

父親要因として子どもと「生活を始めた時期」の違いによって各タイプに特徴的な傾向は認められなかった。

考 察

1. 夫婦の省察の特徴について

夫婦の省察は、〔親省察〕〔子ども省察〕〔他者省察〕の3つに分類され、さらに〔親省察〕と〔子ども省察〕は小カテゴリーで構成されていた。この結果は、朴・杉村（2009）が示した3歳から5歳児をもつ母親の省察モデルが、乳児期の夫婦の省察にも適応される可能性を示している。各カテゴリーをみると、〔親省察〕の〈育児の方針〉と〈育児行動〉は、朴・杉村（2009）が示した幼児期の母親の省察（例：子育ての方針を振り返り改善すべきところを考えることがある。子どもに対する自分の言動に気を付けることがある。）に対応したものと考えられる。この結果からすでに乳児期の初期から育児の方針や育児行動について振り返りをする夫婦が一定の割合でいることが示されたといえる。〈配偶者に対する評価〉は、母親の父親に対する評価と父親の母親に対する評価の両方が含まれており、これは互いに評価し合うという夫婦特有の省察と考えられる。子育ては思い通りにならないことの連続であり、特に初めての育児では理想と現実のギャップから父親、母親共に育児ストレスを抱えることもあるだろう。夫婦のコミュニケーションは父親の育児参加の促進や夫婦関係と関連し（加藤・黒澤・神谷、2014）、特に母親からの父親に対する支持的な働きかけが重要となる（柴山、2007）。本結果はコミュニケーションにおける母親の役割を支持すると同時に、母親に対する

父親の評価や称賛の有効性を示唆するものである。母親にとって父親から称賛や肯定的な評価が得られることは、親としての有能感を確認するきっかけとなり、その結果が育児の肯定的な感情に影響すると考えられる。このような夫婦の省察の積み重ねによって夫婦が互いを育児のよき理解者として認め合うことで、良好な夫婦関係が形成されていくと考えられる。

〔子ども省察〕について、幼児期において養育者の省察は将来を見据えた長期的な視点から子どもの成長について見通しをもったり、親子の相互交渉について子どもがどのように受け止めているか考えを巡らせたりすることが中心となる（朴・杉村，2009）。本研究によって明らかにされた乳児期の夫婦の省察は〈子どもの特徴〉や〈変化・成長〉であり、子どもと向き合っている場での注意や気付き、短期的な子どもの変化についての語りが中心であった。この結果から子どもに関する省察は乳児期から幼児期にかけて、子どもとの相互交渉が蓄積されていくことで、わが子の行動的特徴や短期的な変化の理解から、長期的視点かつ子どもの情動理解へと変化していくと考えることができる。この結果は省察の認知レベルの変化を示すものであり、親としての発達の側面を示していると考えられる。

〔他者省察〕は、夫婦以外の人物・本などについての省察であり、本結果で明らかとなった2ヵ月の省察は妊娠中に受講した保健指導や出産後に病院で受けた看護師や助産師からの助言が中心であった。月齢の低い乳児をもつ親は地域のコミュニティへの参加は比較的少なく、他者の子どもや育児を注意深く観察する機会は少ないと考えられることから、幼児期のように他の親や子どもの言動などをとおして自分の育児を省察することは難しいのではないだろうか。本結果は雑誌やSNSなどによって家庭で育児情報が容易に得られる今日でも、育児期初期の夫婦が、病院などで実施される保健指導を頼りに退院後に夫婦で指導内容を振り返りながら育児をしていることの実態を示すものであり、保健指導の有効性を示唆するものと考えられる。さらに本研究によって病院で実施される保健指導が単に育児の技術的側面だけでなく夫婦関係という情緒的側面に重要となることが示唆された点は新しい知見といえよう。全般的に育児期初期の夫婦の省察の傾向として、2ヵ月では〈子どもの特徴〉が最も多かったことから夫婦のやり取りは親子の直接的な関わり場面での気付きと呼べる認知レベルのものに焦点が向けられる傾向にあるといえる。一方、4ヵ月では全ての夫婦から〈子どもの特徴〉と〈変化・成長〉の語りが認められた。〈成長・変化〉は気付きを基に分析・評価する認知レベルであることから、2ヵ月から4ヵ月にかけて夫婦の省察は低次の省察をベースに高次の省察をするようになる可能性が示唆されたといえる。

2. 夫婦の省察タイプとその関連要因について

夫婦の省察はすべての夫婦に一様ではなく、《全体的省察タイプ》《親・子ども省察タイプ》《子ども省察タイプ》の3つのタイプに分類することができた。《全体的省察タイプ》は〔親

省察〕〔子ども省察〕〔他者省察〕の3つのカテゴリーの語りが認められた。このタイプの父親は家事・育児を分担していたことと、育児情報を得る手段が母親以外にもあることが特徴であった。そして母親は育児休暇期間が1年未満であり復職後の保育計画をし、父親への期待（例：ID ⑦母親「一緒にやれば家事と育児が半分になるから、私もだいぶ楽になるし、（父親の）仕事が早く終わったときはやってもらうようにしているよね。」父親「そうだね。一人だと大変そうだからできるときはやるようにするね。」）と、調整（例：ID ⑤母親「お風呂の入れ方とか、準備から全部教えたよね。」父親「がんがんきますよ。スパルタです。」）をする傾向があることが特徴であった。父親への期待を表す語りでは母親は父親に協力して育児をしたいことを伝え、父親は育児の担い手として必要とされていることを感じ取っていることがうかがえた。朴・杉村（2009）は育児期の親の省察プロセスを検討し、省察について対象と認知レベルによって省察の3層モデルを示した。そこでは高次の省察のためには下位情報が必要であり、下位情報が多いほど次のレベルの省察が豊かになることが指摘されている。このタイプの夫婦は母親が育児においてイニシアティブをとるものの、父親も母親以外から育児情報を得たり、家事や育児を分担して夫婦で共有できる育児の情報量が多いことが省察を円滑にしていると推測される。《全体的省察タイプ》は、日頃から夫婦で育児の振り返りをするなかで、互いの育児に関する考えや対処について改善と共有が行われていることがうかがえる。そのような夫婦のやり取りが育児を肯定的に受け止めることにつながり、結果として省察がさらに豊かなものとなり良好な親子関係や夫婦関係につながるのではないだろうか。

《親・子ども省察タイプ》は、〔親省察〕〔子ども省察〕の2つのカテゴリーの語りが認められたタイプであり、父親に育児経験があること、育児を分担していること、母親から父親への期待があることが特徴であった。父親は比較的育児スキルが高く、母親を頼らずに父親自身の判断で泣きに対処することが語られた（例：ID ①母親「無理やりっていうわけではないけど、気が付いてやってくれる。（父親は）大体何でもできる方だと思う」父親「（母親の）やり方見とって、そのやり方でやるようにしている」）。おそらく《全体的省察タイプ》と同様、育児の経験値から夫婦で共有できる育児の情報量が多く、日々の会話のなかでも省察をしており、育児行動や育児の考え方について改善や共有がなされているのではないだろうか。先行研究でも夫婦で育児を行う上で母親からの働きかけの重要性は指摘されている（柴山，2007）。本研究においても《全体的省察タイプ》と《親・子ども省察タイプ》に共通して、父親の家事育児分担、母親の父親への期待や調整が認められたことは、先行研究を支持する結果であり、〔親省察〕つまり自分たちの育児についての省察に、母親の役割が影響力をもつことを示唆するものと考えられる。一方で母親以外からの育児情報や父親自身の育児経験については、特に保育園への送り迎えや職場で交わされる会話から得られる育児情報は家庭外の環境要因によるものといえる。したがって、父親が母親を介した情報以外に、直接育児情報に触

れることができる機会を提供できるような育児支援へのアプローチが期待される。

《子ども省察タイプ》は〔子ども省察〕のみの語りであったことから、日ごろから夫婦の会話は子どもの特徴や変化に関心が向けられていることが推測される。このタイプの多くは、母親から父親への期待と調整がなく、父親も育児経験や育児情報がないことが特徴であり、仮に父親に育児経験があっても母親が父親に対して期待せず、むしろ実家を頼っている傾向があることが示された（例：ID ⑧母親「留守番を頼むくらいなら（子どもを）一緒に連れていく。」父親「うん。そうしてもらった方がいい。」、ID ⑩母親「私がやった方が早いから、あまり（父親に）お願いしない。」父親「一人で何でもしようとしなくてもいいのに…」）。ID ⑧の父親は母親の留守中に一人で子どもの世話をすることを避け、母親に任せていた。一方ID ⑩の父親は自分を頼って一緒に育児をすることを期待していると感じ取れた。これらの語りは親自身に関する省察は一方向性では成立しにくいことを示唆する結果といえる。

本結果で《全体的省察タイプ》が10組中4組いた一方で《子ども省察タイプ》も4組と一定数示されたことは注目すべき点であり、この結果は乳児期の夫婦の省察が子どもの発達の影響というよりむしろ夫婦間の要因の影響を受けていることの可能性を示しているとも考えることができる。ただし本研究では、省察内容が変化する速さにカップル差があることには触れていない。したがって、4ヵ月に《子ども省察タイプ》であった夫婦が他の2つのタイプよりも遅れて全体的な省察をする可能性について否定できない。今後、夫婦の省察について長期的な視点で検討するために、質問紙調査と面接調査を併用していくことでより詳細な知見を得ることが期待される。

その他、父親が子どもとの生活を始めた時期については、どのタイプにも特徴的な傾向は認められなかった。したがって、夫婦の省察は、父親が育児介入を始めた時期ではなく、どのように育児に関与しているかが重要となると考えられる。

本研究の目的は育児期初期における子どもの泣き場面での夫婦のやり取りの様相について、省察の概念を用いてその詳細を明らかにすることであった。その結果、育児期初期の夫婦が日常のコミュニケーションのなかで省察を行っていること、その内容は〔親省察〕〔子ども省察〕〔他者省察〕の3つに分類されることが分かった。また省察内容は夫婦によって特徴的な傾向があり《全体的省察タイプ》《親・子ども省察タイプ》《子ども省察タイプ》の3タイプあることが示された。そして夫婦の省察に関連する要因として、母親の復職後の保育計画、父親への期待と調整、父親の家事育児分担、母親以外からの育児情報があることが示唆された。母親の復職までの期間が一年以内という期限は、父親の育児介入への期待と調整を高め、父親の家事や育児の分担を積極的に促すことになると考えられる。加えて、父親に母親以外からの育児情報があることで、母親とのやり取りが活発となり省察が豊かなものになる可能性が示唆された。本研究では2ヵ月と4ヵ月における月齢の特徴について明確に触れていな

いが、育児期初期の夫婦の省察は気付きと呼べる認知レベルの省察に始まり、親子の相互交渉が繰り返されることで、より省察対象が多くなり自分たちの育児行動や、配偶者の育児行動の評価という認知レベルの省察に移っていくというプロセスをたどることの可能性が示唆された。一般的に生後2ヵ月頃は夫婦で育児を始めて間もない時期であり、自分たちの育児行動を見つめ直すことは決して容易なことではないだろう。子育てにおける養育者の省察の重要性が指摘されているが、育児期初期では、まず子どもの成長・発達について夫婦で情報を共有し、それを基に養育行動を振り返ることができるよう段階的な育児支援をすることが大切となると考える。

養育者の育児についての省察は育児への肯定感情や子どもの愛着形成に関与することが報告されている (Fonagy, 2000; 森下, 2006)。また、対話による省察によってエンパワーメントが促進されることが指摘されている (村松・渡辺, 2008)。父親の育児参加を促進するために、育児スキルを身に着けることに焦点を当てた指導だけでなく、父親にとって必要な育児情報を父親がキャッチしやすい方法で提供することを考慮した育児支援が期待される。

今後の課題

本研究では、夫婦の省察におけるそれぞれのカテゴリー間の因果関係や養育行動との関連について、母親研究の知見から類推したに過ぎない。また、夫婦の省察と子どもの気質的要因の関連性については触れていない。今後、夫婦の省察過程について養育行動との関連から明らかにすると同時に子どもの育てにくさが夫婦の省察に影響するかについて検討していくことで、身近な夫婦の日常会話に注目した育児支援の介入方法を見出していく必要がある。

さらに、夫婦の省察にとって、父親の育児経験や母親以外から得られる育児情報が重要となることが示唆されたことから、父親が直接育児情報に触れることができる機会を提供できるような育児支援へのアプローチが期待される。ただし、そこには単に育児情報の量的要因だけでなく、他者との対話をとおして子育ての悩みについて解決を模索することや父親としての自覚の芽生え、あるいは父親としての他者評価という別の要因が関連している可能性がある。今後、各要因間の因果関係を含めてデータ数を増やし検証していくことが課題である。

引用文献

- 秋保亮太・縄田健吾・池田 浩・山口裕幸 (2018). チームの振り返りで促進される暗黙の協調：協調課題による実験的検討. 社会心理学研究, 34(2), 67-77.
- 青木聡子 (2009). 幼児をもつ共働き夫婦の育児における協同とそれにかかわる要因：育児の計画における連携・調整と育児行動の分担に着目して. 発達心理学研究, 20(4), 382-392.

- 陳 省仁 (1986). 新生児・乳児の「泣き」について：初期の母子相互交渉及び情動発達における泣きの意味. 北海道大学教育学部紀要, **48**, 187-206.
- Fonagy, P. (1996). The significance of the development of metacognitive control over mental representations in parenting and infant development. *Journal of Clinical Psychoanalysis*, **5**(1), 67-86.
- Fonagy, P. (2000). Attachment and Borderline Personality Disorder. *Journal of the American psychoanalytic Association*, **48**(4), 1129-1146.
- 藤崎真知代 (2002). 育児・保育現場での発達とその支援. 藤崎真知代, 本郷一夫, 金田利子, 無藤 隆編. 現場からみた発達 (pp. 2-14). 京都：ミネルヴァ書房.
- Green, J. A. & Gustafson, G. E. (1983). Individual recognition of human infants on the basis of cries alone. *Developmental Psychology*, **16**(6), 485-493.
- 平嶋慶子 (2007). 各時期の特色：乳児期の特色. 山内光哉 (編), 発達心理学：周産・新生児・乳児・幼児・児童期 (pp. 32-37). 京都：ナカニシヤ出版.
- 石 暁玲・桂田恵美子 (2006). 夫婦間コミュニケーションの視点からの育児不安の検討：乳幼児をもつ母親を対象とした実証的研究. 母性衛生, **47**(1), 222-229.
- 神谷哲司 (2013). 育児期夫婦のペア・データによる家庭内役割観タイプの検討：役割観の異同の類型化と夫婦の関係性の視点から. 発達心理学研究, **24**(3), 238-249.
- 加藤道代・神谷哲司 (2017). 幼児期から青年期における子どもの外在化問題行動と夫婦ペアレンティングの関連. 小児保健研究, **76**(6), 637-643.
- 加藤道代・黒澤 泰・神谷哲司 (2014). 夫婦ペアレンティング調整尺度作成と子育て時期による変化の横断的検討. 心理学研究, **84**(6), 566-575.
- 金 玫志 (2009). 新人保育者による省察の意味とその変容を支える支援のあり方：保育実践後の「保育者間の話し合い（対話）」の中から. 保育学研究, **47**(1), 66-78.
- 興石 薫 (2005). 育児不安の発生機序と対処法略. 東京：風間書房.
- 森下葉子 (2006). 父親になることによる発達とそれに関わる要因. 発達心理学研究, **17**(2), 182-192.
- 村松照美・渡辺勇弥 (2008). 市町村新任保健師と熟練保健師の対話リフレクションの意味. 山梨県立大学看護学部紀要, **10**, 49-57.
- 朴 信永・杉村伸一郎 (2009). 幼児を育てている親の子育てに関する省察の3層モデルの検討. 発達心理学研究, **20**(2), 99-111.
- 澤田忠幸 (2019). 育児期父親の幸福感・育児関与と生活スタイル・妻からの役割期待との関連. 心理学研究, **89**(6), 611-617.
- 柴山真琴 (2007). 共働き夫婦における子どもの送迎分担過程の質的研究. 発達心理学研究, **18**(2), 120-131.
- 清水嘉子 (2020). 育児期にあるペアレンティング——互いの育児の批判をめぐって——. 日本助産学会誌, **34**(1), 103-113.
- 田代佳織・重橋のぞみ (2019). 養育者の自己内省と内的作業モデルが子育てに及ぼす影響. 福岡女学院大学大学院臨床心理学紀要, **16**, 43-50.

追記

本研究はJSPS 科研費（基盤研究C：課題番号16K12103）の助成を受けて実施された。
本研究の実施にあたりご協力いただいたご家庭の皆様にご心から感謝申し上げます。

Abstract

A Qualitative Study of Parental Reflection in
Early Childcare Period

Saori Koyama¹, Masako Moriyama², Sachiko Kobayashi³,
Tomoko Obara² and Yasuyo Nishino¹

This study aimed to clarify the details of daily parental interactions in the early childcare period by using the concept of reflection and to examine the related factors. The study participants were 10 pairs of parents who had a 2-month-old infant at the start of the study. We conducted an interview survey focusing on their infant's crying scenes at home at 2 and 4 months of age.

The results revealed that the parental reflections consisted of three categories: [Reflections on Oneself (PR): childcare policies / childcare behavior / evaluation of spouse]; [Reflections on Children by Parents (CR): children's characteristics / children's changes and growth]; and [Parents' Reflections on Themselves Through Other People (OR)].

Overall, [CR: children's characteristics] tended to be high at 2 months of age and [CR: children's characteristics / children's changes and growth] and [PR: childcare behavior / evaluation of spouse] tended to be high at 4 months of age. The contents of parental reflection differed for each couple, and were classified into the following three types: Couples who talked about all reflection categories (overall reflection-type), couples who talked about PR and CR (parent and child reflection-type), and couples who talked about CR only (child reflection-type). Overall reflection-type mothers had childcare leave of less than a year and had already planned childcare before returning to work. In addition, they had expectations of and made adjustments concerning their husbands in regard to childcare. The characteristics of this type of father included that they could obtain childcare information from sources other than their wives (e.g., at work, at nursery school), and that they shared housework and childcare responsibilities with their wives.

Keywords: parental reflection, father's childcare, qualitative research

¹ Faculty of Health Sciences, Hiroshima Shudo University

² Ohkagakuen University

³ University of Shizuoka